
[実践報告]

『出雲国風土記』を用いた 地域の神話・歴史教育

山村桃子

島根県立大学短期大学部総合文化学科

[PRACTICAL REPORT]

Local Myth and History Education Using the Izumo no Kuni Fudoki

Momoko YAMAMURA

Department of Arts and Sciences, The University of Shimane Junior College

しまね 地域共生センター 紀要

*Bulletin of Shimane Center for Enrichment through Community,
The University of Shimane Junior College*

vol.

2

September
2015

[実践報告]

『出雲国風土記』を用いた地域の神話・歴史教育

山村桃子

島根県立大学短期大学部総合文化学科

キーワード

出雲国風土記

神話教育

歴史教育

[PRACTICAL REPORT]

Local Myth and History Education Using the *Izumo no Kuni Fudoki*

Momoko YAMAMURA

Department of Arts and Sciences, The University of Shimane Junior College

Keywords

Izumo no Kuni Fudoki

myth education

history education

1 はじめに

風土記は、713(和銅7)年に政府が諸国に提出を命じた報告書(解文)である。

現在大部分が残るのは播磨・出雲・常陸・豊後・肥前の5国の風土記のみであるが、中でも20年の歳月をかけて733(天平5)年に提出された『出雲国風土記』は唯一の完本として貴重なものである。

本学総合文化学科における「日本古典文学を歩く」(2年後期開講)の授業では、『出雲国風土記』をテキストとして、学生が地域の神話と歴史についての学問的知識を身につけ、また体験的に学ぶため、講義、演習、フィールド学習を組み合わせた授業を実施した。

本稿は平成24年度分を新規事業として、以後26年度までの3年間継続しておこなった、その授業の実践報告である。

2 教材としての『出雲国風土記』

1) 『出雲国風土記』について

本学学生が「神話」と聞いて想起するのは、『古事記』の所謂「出雲神話」であり、『出雲国風土記』ではないだろう。題名や「国引き」はまだ認知度が高いものの、全く知らなかったという学生も多にいる。

国引き神話は、島根県の出雲地方のうち、宍道湖の北に位置する島根半島の由来を語る内容をもつ。県内には、くにびき道路、くにびき大橋、くにびきメッセなど、「国引き」を冠した名称をもつ施設が見られ、至る所で国引きの場面を画いた絵画も見られる。しかしそれらの名称の由来と『出雲国風土記』の国引き神話を結びつけることができる学生は少ないだろう。

風土記に要請された内容は以下である。

畿内と七つの道との諸の国・郡・郷、名は好き字を著けよ。その郡内に生れる、銀・銅・彩色・草木・禽・獸・魚・虫等の物は、具に色目を録し、及、土地の沃えたると瘠せたる、山・

川・原・野の名号の所由、又、古老の相伝ふる旧聞異し事。史籍に載して言して上れ。

(『続日本紀』和銅六年五月甲子)

地理誌としての性格を持つ『出雲国風土記』には、『古事記』の「出雲神話」で有名なヤマタノオロチやオオクニヌシの一連の物語はない。あるのは地名起源に関わる断片的な神話伝承であり、『古事記』のように神話教材として利用することが難しい形式をもつ。『出雲国風土記』について知られていることが少ないのは、こうしたテキストの性格による。

しかし、『古事記』が官人・太安万侶により撰録された中央政府の視点による神話であるのに対し、『出雲国風土記』は出雲国造・意宇郡大領である出雲臣広嶋と秋鹿郡の人である神宅臣金足^{みやけのおみかなたり}によって記された。出雲国側の視点に立つ後者からは、前者に描かれない古代出雲国の神話と歴史を知ることができるといえる。

2) 国引き

『出雲国風土記』の中で最も著名かつ壮大な神話として、国引きの箇所がある。

これは意宇郡(松江・安来地域)の郡名起源として記され、八束水臣津野命^{やつかみづおみづののみこと}により、新羅、隠岐、高志の国の余りを綱で引き寄せ、佐比売山(三瓶山)や火神岳(大山)を杭として繋ぎ止めて島根半島を形成するという譚である。最後に「国を引き訖えつ」と意宇の杜に杖を突き立て、「意恵^{おゑ}」(国引きの作業を終えたという意)と言ったことにより、その地が意宇郡の名となったというものである。

一郡の地名起源譚としては長大な詞章、また雄大な内容をもつ国引きは、出雲国の地理的特徴に基づいてきわめて巧緻に完成されている。

国引きの動機は、「八雲立つ出雲国は、狭布^{さふ}の稚国^{わかくに}なるかも。初国小さく作らせり。故れ、作り縫はむ」と記された。中国地方にある出雲国は、北寄りに位置する中国山脈のために横長の狭小の地であった。この神話において、まだ半島部が存在しない「狭布の稚国」を出雲の神によって拡張したことが語られる。半島と湖は出雲国を象徴

する景観である。

この神話を通して学ぶことができるのは、地域の地理、歴史、生活、信仰と多岐にわたる。国引きの綱の杭としての役割を果たした佐比売山、火神岳は、その名から神としての信仰が窺える。さらにその綱は、島根半島の東西両端部にある藪の長浜と夜見の嶋(弓ヶ浜)とされる。国引き神話は鳥瞰的な視点をもって、実際の自然の景観からたくましい想像力をもとに形成された。また、国の余りがみとめられた新羅・隠岐・高志国とは、いずれも出雲国との交易を通じた関係が指摘され、一見非現実な神話は、生活する人々の実感や歴史的事実に基づいていた。大陸に面した日本海地域は、かつて海外国との交易がさかんであったが、大和朝廷の公式な対外航路として瀬戸内海が指定されたことによって衰退した。

次に挙げるのは国引きについての学生の感想の一部である。

『出雲国風土記』という書名を日本史の授業で聞いたことがあっても、その内容を深く知る機会もなく、ただの「有名な書物」としか考えていなかった。しかし、授業でその話の内容を学ぶと、とても興味深いものであった。…国引きで縫い付けられたとされる地域を地図から見ると現在の島根半島に位置するが、意宇郡は島根半島ではなく、現在の松江市にあたる。このことから八束水臣津野命は現在の松江市から国引きをしたことがわかる。そうすると、この話のスケールの雄大さがよくわかる。最初は国が小さいからという理由だけで他の国や地域の余った土地を勝手に引っ張って縫い付け、なんて自分勝手な話なのだと思ったが、八束水臣津野命や彼の使った鋤や綱の大きさ、島根半島の大きさを考えるとただの自分勝手な話とは考えられなくなった。

(H24年度/O)

3) 地名と地名起源譚

『出雲国風土記』を含め、各国の風土記は次のような短い地名起源譚の集合体である。

安来の郷。…神須佐之袁の命、天の壁立ち
廻り坐しき。その時、此処に來坐して詔りたま
ひしく、「吾が御心は、安平やすけく成りぬ」と詔り
たまひき。故れ、安來と云ふ。

(意宇郡)

安來郷(現安來市)の地名は、スサノヲが諸国
を巡り、到り着いた場所で「私の心は安らかになっ
た」と言ったことに由来するという。

風土記の地名伝承では、神や天皇といった権
威者の発する言葉がその土地の地名起源となるこ
とが多い。その地は、「安平やすけく成りぬ」と神の心
を鎮めた、祝福された土地として神話化される。

こうした地名起源の神話は、実際には起源の
わからない地名を、その地名のもつ音から遡源的
に創り上げたものである。

そもそも、地名は自然地名と文化地名とに大きく
分けられ、実際の地理や生活環境によって呼びあ
らわされ定着した。実際の地名と地名起源譚が
すべて無関係であるわけではないが、多くは恣意
的なものである。そうした伝承とともにある人々の
生を、内田(2009)は、「ミユス、語られてあること
の中に美しく企投して生きること」であり、「ミユス
は単に虚構で虚妄だというのではなく、そこにこそ、
いっそ不合理故にそこに信を置く生き方」¹⁾とした。

授業では、地名と地名伝承の関係とその形成
過程について講義をおこなった。そうした中で、学
生にとって最も身近な地名が話題となる。短大の
所在地である「浜乃木はまのぎ」という地名の周辺には、
「上乃木あがのぎ」「乃木福富のぎふくとみ」などの乃木の付く地名が
あり、また一つの町が広域にわたる。「野城」のも
う一つの読み「のしろ」に対応するべく「乃白のしら」と
いう地名もある。『出雲国風土記』の河川記事で
は「野代川。源は郡家の西南一十八里なる須我
山より出で、北へ流れて入海に入る」、「野代の海
の中に蚊島あり。周り六十歩なり。中央は涅土に
して、四方は並びに礮なり」とあり、野代川は忌部
川、野代海は宍道湖に比定される。さらに寺社
記事では、野城の社、野代の社が複数記され、
現在もその双方が乃木の地域に残されている。

一方、安來市にもまた能義のぎという地名があり、

かつては能義郡、能義村があった。『出雲国風
土記』の「野城の駅。…野城大神の坐す。故れ、
野城と云ふ」(意宇郡)は、駅の位置からもこの能
義付近に比定されている。

さらに、この駅の記事には野城大神の存在も示
されている。大神と称されるのはこの神と天の下
作らしし大神、熊野大神、佐太大神と四柱のみで
あり、その信仰圏の広さが窺える。

このように、意宇郡の広域にわたりみられる野城
(のぎ・のしろ)という地名について、関(2006)は、
狭田国のような国のレベルで野城国があり、中央
部に国庁、意宇郡家、黒田駅が設置されて野城
国が分断され、東西に「のぎ・のしろ」の地名が
残ったこと、また、本来「野城」は「ぬ(の)しろ」と
呼ばれていたのが、後に「のぎ」と呼ばれるようになっ
たとする。また、一定地域の有力神であった野城
大神は、『出雲国風土記』編纂の段階で既に大
神としての神威を失ったとした²⁾。

国引きには、「狭田国」や「闇見国」などの出
雲国における小国名がみられる。こうした国として
の単位で、かつて「野城国」という小国があったと
考えるならば、浜乃木、上乃木が広域にわたる実
感をもつ学生にとって納得できることだろう。かつ
てそうした広域に神威をもった野城大神は、現在
も乃木地域の神として信仰される。

4) 古事記』との比較

授業では『古事記』との比較を通して、『出雲
国風土記』の特徴を確認した。学生は1年次に
『古事記』の授業を受講しており、既に「出雲神
話」との比較をおこなうことが可能である。注目し
たのは、aスサノヲ、bクシナダヒメ、cオホクニヌシ
の宮、dキサカヒメの4点である。

aスサノヲは、「出雲神話」ではその荒々しい性
格により、高天原の反秩序的な存在であり地上では
その力をもってヤマタノヲロチを退治した。『出雲
国風土記』では、次のように粗暴さを一切みせる
ことがない。

神須佐能袁の命、詔りたまひしく、「此の国は、
小さき国なれども国処なり。故れ、我が御名
は、木石には着けじ」と詔りたまひて、すなは

ち己が命の御魂を鎮め置き給ひき。

(飯石郡)

bクシナダヒメについては、出産の地をもとめた際の言葉が熊谷の地名起源となる。

久志伊奈太美等与麻奴良比売の命、任身みて産まむとしたまひし時に及びて、生まむ処を求ぎたまひき。その時、此処に到り来て詔りたまひしく、「甚久々麻々志積谷なり」とのりたまひき。故れ、熊谷と云ふ。

(飯石郡)

ここで「出雲神話」でみられるスサノヲとの婚姻は示されず、子供の父親かどうか不明である。ここで、クシナダヒメは生命を生み出す女神としてある。

cオオクニヌシの宮は、「出雲神話」では国譲りの代償としての位置づけにある。しかし、『出雲国風土記』では「天の下所造らしし大神の宮奉らむとして、諸の皇神等、宮処に参集ひて杵築きき」(出雲郡)とあり、皇神等が自発的に参集し築いたという形になる。

さらに、dキサカヒメについて、この神は「出雲神話」においては、ウムカヒメと共に、オオクニヌシを蘇生させた貝の女神である。『出雲国風土記』においては、佐太大神を出産した母神として登場する。

加賀の神埼。すなはち窟あり。…【謂はゆる佐太の大神の産出れませる処なり。産出れませむ時に臨みて、弓箭亡せ坐しき。その時、御祖神魂の命の御子、枳佐加比売の命、願ぎたまひしく、「吾が御子、麻須羅神の御子に坐さば、亡せし弓箭出で来」と願ぎ坐しき】。

(嶋根郡)

「狭田国」において信奉された佐太大神は、出雲国二の宮として現在も信仰が厚い。海の窟での出生譚は、漁労民に信奉された記憶を残すが、「サダ」は神聖なる田を意味し、農耕の神としての神格をもつと考えられる。

「出雲神話」において信じられたオオクニヌシ物語はこのように地域の視点から捉え直すことが可

能である。二つのテキストを対照させることで、そこに佐太大神や熊野大神という地域の神が信じられたこと、「出雲神話」と出雲国の神話が異なるものであることを提示することができるだろう。

3 『出雲国風土記』学びのフィールド

1) 史蹟から学ぶ

『出雲国風土記』の記述する中心部は、出雲国東部の意宇郡(現在の松江市、安来市)となる。対して、『古事記』の「出雲神話」は、伊賦夜坂(松江市東出雲町揖屋)や比婆山(安来市)に関わる伊耶那美命の神話を除けば、主に、出雲国西部の斐伊川流域を舞台とする。

出雲国庁は1966年に発表された恩田清氏の調査結果に基づき、松江市大庭町において発見された。現在は出雲国庁跡として整備されている。周辺は基盤の目状に整備された田園に囲まれ、それを意宇郡の神名樋野(「神名樋野。郡家の西北三里一百廿九歩なり。高さ八十丈、周り六里卅二歩なり」意宇郡)である茶白山が見下ろす位置にある。

風土記の記載事項で復元された場をも含めて現在でも見ることができるのは、国庁を取り囲むように蛇行する意宇河(「意宇河。源は郡家の正南一十八里なる熊野山より出で、北へ流れて入海に入る。【年魚・伊具比あり。】」)、山代新造院跡(「新たに造れる院一所。山代の郷の中にあり。郡家の西北二里なり。教堂を建立つ」意宇郡)である。周辺は古墳密集地帯であり、前方後方墳と名づけられた最初の例である山代二子塚古墳、石室が露出した岩屋後古墳、「額田部臣」の銘文が刻まれた太刀が発見された岡田山古墳群などを見ることができる。

意宇河を約7km 遡れば、出雲一宮である熊野大社(「熊野の大社」)「熊野山。郡家の正南一十八里なり。【檜・檀あり。謂はゆる熊野の大神の社坐す。】」が立つ。また、風土記に記載はないが、国庁付近には有名な神魂神社、八重垣神社もみられる。

古代出雲国の中心部は現在の出雲大社周辺といったイメージが強い。さらに、現在の島根県庁や松江市役所は大橋以北の橋北に位置するため、中心部としての橋南地域をイメージさせることは難しい。しかし、『出雲国風土記』とそれを用いたフィールド学習を通じて、かつての国の中心部が松江橋南地域にあったことを知り、体感することができるのではないだろうか。島根県の中心部は長い時間を経て、松江市橋南から出雲大社周辺へ、そして松江市橋北へと変遷した。こうした視点は、自身が生きられる以上の長い時間について意識を向け、時間に埋もれた記憶へと目を向ける姿勢を育てることに繋がるだろう。

2) 博物館で学ぶ

以上のような恵まれた環境は、教室にとどまらない豊かな学びの場である。アクティブラーニングの趨勢により、文系授業において体験型学習を導入する例もしばしば聞く。体験の場はさまざまであるが、地域の文化施設としてあるミュージアムも学習の場として活用され始めている。

博物館は、学生たちにとって学習施設というよりもむしろ楽しむ施設である。各分野の専門家たちによって収集・展示・解説がなされる高度な情報の場でありながらも、博物館が楽しさを喚起させる場としてあるのは、非日常空間と現物がもつものの圧倒的な力と、それを目の当たりにする体験があるためだろう。

大庭や山代にわたる多くの史蹟は、「八雲立つ風土記の丘」によって管理・整備され、展示学習室も備えられる。常設展示「古代出雲の中心地意宇」では、国庁を中心とした奈良時代復元模型と映像により、当時の景観を学ぶことができる。「ガイダンス山代の郷」では、実際に古墳の土葬を見学することが可能である。さらに出雲市に足を伸ばせば、大量の銅剣が出土した荒神谷博物館、四隅突出型墳丘墓のある弥生の森博物館、出雲大社に隣接した古代出雲歴史博物館があり、これら豊富な博物館を学習施設として利用することが可能である。美術館においても、平成25年度には島根県立美術館では美と繁栄の神を描いた

堂本印象「木花開耶姫」(1929)、古代出雲歴史博物館では青木繁「大穴牟知神」(1905)が展示され、こうしたミュージアムの展示内容に合わせた授業設計を可能とした。

授業に合わせて展示を利用する方法がある一方、時期や時間上の制約はあるものの、展示に合わせて授業設計する方法がある。地域に関わる授業において、後者は有効な方法であるといえるのではないか。

近年では地域に密着したエコミュージアム及びコミュニティミュージアムの提唱もあり、地方のミュージアムと教育機関は、地域文化の発信と生涯教育という共通の目的を有している。今後さらに両者の意識の共有が求められる。フィールド学習は知識と現実を結びつける場であり、学生の新たな視点の獲得に繋がるものといえるだろう。

4 授業の実践内容

1) 授業概要

授業内容は以下の4つの内容により構成した。

- (1) 出雲国の歴史と出雲国風土記の神話内容について講義を通して学ぶ。
- (2) フィールド学習先について事前調査発表(グループ)をおこなう。
- (3) 毎回のフィールド学習後はレポートを提出する。
- (4) 各自の関心に沿った土地の歴史について調査発表(個人)をおこなう。

初年次は(1)(2)のみで構成し、最後にレポートを提出することで評価をおこなった。しかし教員の説明ばかりが先行し、学生が主体的に考えるといった時間を持つことができなかったという反省をふまえて、次年目以降はフィールド学習の回数を5回から4回に変更した。そして新たに追加したのが(3)(4)である。

(3)では毎回のレポート提出によって、ただ漫然とフィールド学習に参加するのではなく、何に注目して学習をすべきなのかを明確化した。(4)は、『出雲国風土記』を学んだことを活かし、それを自身

の関心ある土地に応用させる課題である。短大周辺でも、自身の故郷でも、気になっていた地名でもよい。①その土地の歴史について、地名事典及び各地の市誌県誌を手がかりに文献調査をし、②実際の地理・景観についてフィールド調査をおこない、③地名の由来について考察するという流れで調査発表を課した。

土地の歴史や地名の由来、伝承について考えることは風土記を学ぶ上で最大の醍醐味であり、学生による授業のまとめでありつつ、学んだことを次に活かすためのステップとなると考える。

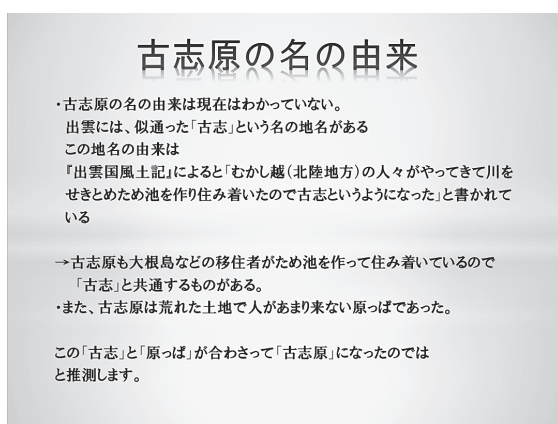


写真1 古志原の歴史(H26年度/Y)

このように、毎年ごとに〈動く時間〉よりもさらに〈考える時間〉の比重を高めた。学生の問題意識も徐々に深まり、3年目には発表の時間で自由な質問や意見を交わすようになったことは授業として大きな収穫であった。

◆平成26年度シラバス

1. 講義:『出雲国風土記』とは何か
2. 講義:国引きを読む
3. 講義:『古事記』との比較
4. 演習:出雲国庁が発見されるまで
5. フィールド学習①国庁を歩く
6. 演習:古墳について
7. フィールド学習②古墳を歩く
8. 演習:たたら製鉄について
9. フィールド学習③たたらを歩く
10. 演習:神社について
11. フィールド学習④神社を歩く

12. 演習:土地の歴史①
13. 演習:土地の歴史②
14. 演習:土地の歴史③
15. 講義とフィールド学習の総括

授業は、講義、演習、フィールド学習を交互におこなう形で実施した。①国庁、②古墳、③たたら、④神社の4つの観点から『出雲国風土記』とその時代を考察するため、グループに分かれ調査発表を行う。フィールド学習は必ずその次の回に実施する。このことによって、学生は事前の発表課題で予め知識を持ち、問題点を持った上で、フィールド学習に臨むことができた。次は一人の学生の感想である。

授業では、事前学習の大切さを学んだと思います。何も知らずにその土地へ行くのと、歴史などの知識を持って行くのとは違うと思いました。これからどこかへ観光に行く時は、きちんと事前学習を行いたいと思います。

(H25年度/S)

また、演習では学生の発表だけでなく、講義を合わせる形で行ったため、不十分な箇所をこちらで補足し、見るべきポイントについて指示をおこなった。

2)フィールド学習の観点と記録、反応

(1)「国庁を歩く」

最初のフィールド学習として、古代出雲の中心部を学習するため、八雲立つ風土記の丘展示学習館・出雲国庁跡・六所神社・意字の杜・出雲国分寺跡を回った。これは毎年変わらないコースである。まず展示学習館で、研究員の方の説明を受け、国庁を中心とした模型や映像、埴輪などの出土品を見せていただいた。模型は奈良時代の国庁周辺を再現しており、実地でイメージするために非常に効果的であった。

その後実地を歩き、国庁跡では復元された柱跡を、裏手にある六所神社の機能を説明した。神社の南側を流れる意字川を確認した後、国引きの最後に神が衝いたという意字の杜推定地、出雲国分寺跡の柱跡を見学した。神名槌野とその麓に広がる地帯、基盤目条に区切られた田園

に、古代の風景がそのまま残されたかのような感慨をもつ学生もいた。

意字の杜は中規模な森のようなものだと想像していたので、実際とはイメージが異なりましたが、辺りがよく見渡せる位置にあったので、この場所にあるのは納得できました。

(H25年度/M)



写真2 出雲国庁跡

(2)古墳を歩く

古墳は、当時の権力者の富と力の象徴である。事前調査では、古墳とは何か、副葬品、埴輪、内部構造、古墳の種類、県内の古墳数、県内の古墳の形式について基礎的な事項を調べさせ、見学する古墳と、その他の古墳について任意に調査させた。短大敷地内にある奥山横穴群、近辺の乃木二子塚古墳について実際に足を運んだ年もあった。

フィールド学習では、山代二子塚古墳、岩屋後古墳、古曾志大谷古墳群を選んだ。

また古曾志大谷古墳群は、現在古墳の丘古曾志公園として整備され、屋外の展示パネルで、当時の様子について学ぶことができる。またこの古墳は、宍道湖が展望できる高台に位置し、古墳の目的として権力を誇示するために選ばれた場所であることを体感させることができる貴重な場所である。類似する環境にある古墳の例として、滋賀県の琵琶湖北部にある古保利古墳群(高月町・西野町)を挙げ、湖上からしか見ることのできない古墳が多数築造されたことを説明した。

岩屋後古墳は、屋根の一部が欠けていたけ

れど、揺れないぐらいにしっかりと固定されていて驚きました。入り口は狭かったけれど、中は意外と広く、天井も高めで小さな家のようにした。

(H25年度/I)

古曾志古墳は見晴らしの良い丘の上に古墳があり、周囲を山と宍道湖に囲まれていた。最も大きな古曾志大谷一号墳(模型)が最も高い場所にあった。古曾志周辺の地域を治めた支配者のために造られた前方後方墳である。また、その他の古墳は四角形の方墳が多かった。方墳は二、三基ずつまとまって造られていた。当時の人々にとって、山や湖などの自然が重要であったことがよく分かった。

(H26年度/K)

近年、古墳についての民間での関心が徐々に高まっているという。授業では、食品やアニメーションなど、古墳が文化資源として用いられている例についても、学生・教員の双方から紹介した。学生の中には、公務員として地域活性化に携わり、現在学んでいる歴史についての知識を活かしたPRをしたいという者もあり、大学における地域教育の重要性が感じられた。



写真3 岩屋後古墳

(3)たたらを歩く

たたらについての直接の記述は『出雲国風土記』には見えない。しかし、以下には砂鉄の記述があり、古代から鉄の産出地であったことが窺える。

波多の小川。源は郡家の西南二十四郷なる志許斐山より出で、北へ流れて須佐河に

入る。【鉄有り】。

飯石の小川。源は郡家の正東一十二里なる佐久礼山より出で、北へ流れて三屋川に入る。【鉄有り】。 (飯石郡)

たたらは大量の木炭を必要とするため、森林の豊富な山間部においておこなわれる。造られた鋼は、河川によって入海へ運ばれた。安来市もそのようにして鋼の町として栄えた歴史がある。

安来市広瀬町西比田には、たたらの神である金屋子神が祀られる。そこに残る縁起『金屋子神社由緒略記』には、播磨国岩鍋(兵庫県千種町岩野辺)から飛来した白鷺が比田の地に到来したという神話が載る。『播磨国風土記』の岩鍋に該当する記述は次のようにある。

敷草の村。草を敷きて神の座と為しき。…

【柀・粉・栗・黄蓮・黒葛生ふ。鉄を出す。狼・罫住めり】 (宍禾郡)

岩鍋、現在の千種は千種鉄としてたたらで有名な地であり、吉備国も『古今和歌集』には「まかぬ吹く吉備の中山」とたたらを意味する枕詞がみられ、古来より鉄の産地であったことが窺える。金屋子神はこうした地域に信奉されたたたらの神であり、鳥根県にとどまらず、中国山地や中国地方全体の広がりなかで捉える視点が必要となる。

授業では、年ごとに、和鋼博物館、鉄の歴史村、菅谷だたら山内を見学し、博物館員の方による解説と、展示物や映像によりたたらの製造過程を学んだ。

雲南市掛合町では古墳時代のたたら跡が発見され、出雲国風土記にも登場する。たたらの神である金屋子神の神話・民話がある。天秤ふいごは中国山地で発達したもので、中国山地のたたらによる生産量を飛躍的に増大させた。安来は良質な原料と改良され続けた伝統ある技術で、今も昔も優れた鋼の供給地となっている。 (H26年度/F)



写真4 菅谷だたら山内

(4) 神社を歩く

神社に様々ある中、『出雲国風土記』に記載され、現在も地域での崇敬の高い熊野神社がある。意宇河上流の熊野山の麓に位置し、下流の国庁と繋がる。

熊野大神は、熊野加武呂命、『出雲国造神賀詞』には加夫呂伎熊野大神御氣野命かぶろきまのおほかみみけののみことと別名があり、カムロ、カブロキ、は「神」、ミケは食糧をあらわし、食糧神としての神格をもつ。

また、出雲国造の火継式の際は、境内の鑽火殿に保管された燧ひきりうすひきりきね白・燧杵を用いるという点でも、国造家との関わりがきわめて深い神社である。

また、神社での学習の観点として、鳥居・注連縄・神社様式に注目させた。鳥居や注連縄は、聖域の境界としての意味をもち、それぞれに様式をもつ。出雲地方の神社は大社造で有名である。その現存最古である神魂神社において、大社造特有の、心御柱、宇頭柱、霧除けの屋根の特徴を説明した。また、摂社は流造の様式を持つことも確認できた。

熊野大社に祀られている神はスサノオノミコトで、神祖熊野大神櫛御毛沼命と言われている食糧の神を意味した名で呼ばれている。「くし」が神々しい、「みけ」が食べ物という意味です。風土記には熊野山にあると記されていたが、現在では麓の下の宮に移されている。もともと「熊野」とは、山の奥深い所という意味で、全国にみられる地名である。スサノオが祀られている御本殿の左右には、イザナミノミコトが祀られている伊邪那美神社とクシイ

ナダヒメが祀られる稲田神社がある。境内には他にも稲荷神社、荒神社などがあった。また舞殿という立派な舞台もあり、ここで祭事が行われていた様子であった。

(H25年度/T)



写真5 熊野大社鑽火殿

4) 学生の感想

以下、授業全体を振り返った学生の感想を挙げる。

『出雲国風土記』が語る出雲の神話は、出雲国と神々との深い関わりを感じさせるものでした。特に国引き神話では、八束水臣津野命が隠岐や朝鮮から国を切り分けて今の島根半島を作った話は、島根がどのようにしてできあがったのかということと、その当時の他国との関わりについても窺えて、出雲の歴史と神話の世界が同時に感じられるものでした。

(H26年度/Y)

島根県東部は「神話のふるさとである」とは思っていて、神社や遺跡を見に行けるという気軽な気持ちで授業を受講してみました。講義を聴くうち、地名にはいわれがあり、遺跡や神社がなぜそこに存在しているかということも考察してみる必要があるとわかりました。また講義だけで地域の歴史がわかったつもりになっていたのですが、自分が実際にその所在地に行って、その景色をみて、その空気を感じることによって、初めてその歴史を理解できたのではないかなと思います。

(H24年度/S)

5 おわりに

3年間『出雲国風土記』をテキストとして、学生による事前の調査発表とフィールド学習の実施という構成を軸に、毎年の学生の意見を取り入れ、見学先と課題の内容に少しずつ変化や改善を加えながら授業を実施した。

今後改善していくべき点は、事前学習だけでなく事後学習にも力を入れるということである。毎回のフィードバックは、教員のみではなく、学生自身によっておこなうことがより効果的であると感じた。

授業設計を通じ、地域全体が豊かな博物館であり、学びの施設であることを知ることもなった。教室外における地域の神話・歴史学習教材はきわめて豊富である。

平成26年度の授業の終盤、松江市の東百塚山古墳群において四隅突出型墳丘墓が確認されたというニュースが県内の新聞やテレビを賑わせた。国庁跡から意字河を隔てて400m先に発見され、141基もの古墳があること、また祭祀に用いられた吉備系土器も発見されたという。授業では弥生時代の四隅突出型墳丘墓についても解説をおこない、国庁周辺を歩いた。ここには古代が現在進行形で私たちの生活に迫ることへの実感があつた。

本授業は『出雲国風土記』についての授業というよりも、『出雲国風土記』を用いた授業というほうが相応しい。古代の文化と歴史、伝承が重層する神話テキストは、分野を超えた学びを可能とする魅力的な教材であるといえるだろう。

謝辞

本授業は、八雲立つ風土記の丘、和鋼博物館、荒神谷博物館、鉄の歴史村、島根県立美術館、古代出雲歴史博物館の関係者の方の多大な協力により実施することができました。この場を借りて心より御礼を申し上げます。

付記

本稿は、平成26年度事業報告書「出雲国風土記を歩く」を基に大幅に加筆したものである。

注

1) 内田賢徳. 伝承の生成と知解. 万葉集の今を考える (初版), 東京, 新典社, 55-70, 2009.

2) 関和彦. 『出雲国風土記』註論(初版), 東京, 明石書店, 163-172, 2006.

引用文献

・植垣節也. 新編日本古典文学全集 風土記(初版), 東京, 小学館, 1997.


受付:平成27年6月19日 受理:平成27年7月24日

しまね 地域共生 センター

*Shimane Center
for Enrichment through Community,
The University of Shimane
Junior College*



島根県立大学短期大学部
松江キャンパス

 文部科学省
地(知)の拠点